

研修中にバックレた店のトップが家まで来て、お仕置きルーインドオーガズムでドロドロにされた

体験版

俺様テクニシャン店長×見た目陽キャ風中身真面目大学生

攻め：澤多（さわだ）、サワ

受け：三津木（みつぎ）、ミツ

要素：俺様攻め、強気受け、拘束、寸止め、焦らし、乳首責め、言葉責め、鬼頭責め、前立腺責め、ルーインドオーガズム、射精管理、攻めフェラ、空イキ、連続絶頂、キスハメ、トコロテン、対面座位、密着正常位、潮吹き

ぱっとしない男の一人暮らしの家なんて、どうせ誰も来るわけない。色恋沙汰のない俺には痴情のもつれ等があるわけもなく、可憐な女性から付きまとわれた経験も皆無だ。万が一、窃盗をもくろむ男が現れたとしても、こちらも拳で向かったらいいんだと適当に考えていた。だからこれは、俺の防犯に対する意識の低さが招いた結果とも考えられる。

でも、本当によくなかったのは俺の不用心じゃない。どちらかと言うと、金に目がくらんで何にでもいい返事をしたあの日がいけない。

「んは、ああ、あゝ あああああッ！やあ、も、止めないで、イカせて、イカせてえっ！！」

「何甘えてんだ、このバックレ野郎が。舐めた真似しといて、簡単にイカせてもらえと思うなよ？」

もしもあの時、稼ぎたいから頑張りますなんて言わなければ。研修もするなんて言わなければ。俺はこうして手の自由を奪われて、イク寸前で止められて、じわじわとせりあがる精液が漏れていく感覚なんか経験しなくて済んだ。しかもそれを、何度も何度もお見舞いされることもなかったんだ。

「あふ、う、うあああ...！！お、ねがい、します、も、もぉ死ぬ...ッ！イカせてください、出したい、ちゃんと出したいいいい...っっ！！」

「だからダメだって。今日は時間関係ねえからな。ミツが心の底から反省するまでやめない。お前の射精、俺が全部台無しにしてやる」

「そ、んな...！や、あ、あう、ううっ、んんんっ！はぁ、あ、あ、あああ
あああっ！！」

びくびくと震える俺の熱を撫でて、止まった射精への欲求を再起される。もういい。イカせるつもりがないなら触らないでくれと首を振った。けれどこの人は、俺を決して甘やかしてはくれない。でもよくよく思い返せば、すべては自業自得なんだと言わざるを得なかった。

3週間前、俺は高時給のアルバイトを探していて、ボーズバーのスタッフに応募した。運よく面接まで行ったところ、店長である澤多さんから、さらにランクの高い時給の仕事にもチャレンジできると説明を受けた。聞けば、誰でもできるわけではなく、澤多さんに見込まれた人だけが受けれるチャンスだそうで、しかも提示された時給は2500円。これはやるしかない、俺は目を輝かせてその話を飲んだ。

しかし、いざ接客の研修が始まると、澤多さんは俺の乳首に触れるわ、尻もいじるわ、なんなら彼のブツも入れてくるわと、セクハラではすまされない内容だった。それはあくまで接客時、お客様から悪戯されても冷静な対処ができるようにという名目だったけれど、やられる俺は落ち着いてなんかいられない。なので大いに暴れたところ、ペナルティで散々アルコールも飲まされた。3時間の研修

後、約束通り7500円を握りしめて帰ったはいいが、これ以上は無理だと心が折れてしまった。

というわけで、俺は自分で週に4回か5回は入りたいと出したシフトを、連絡なしにすべてバックレている。ただ、最初の3日くらいはスマホに電話が入ったものの、あとは音沙汰なく終わっていた。だから、うまいこと逃げられたと思って安心していたんだ。

その油断が、まさに命取りだった。

夜の21時、家のインターホンが突然鳴った。何かと思ってドアの窓から外を見ると、帽子をかぶり、ポロシャツにウィンドブレーカー、デニムといった仕事着風の格好の男性が、段ボール箱を抱えて立っている。見たところ、何かの宅配を請け負っている業者さんのようだ。あれ、俺って何かネットで買い物をしたんだろうかと首をかしげたけれど、もしかしたら隣の人の間違いかもしれない。一応出るだけ出ると、鍵を開けて扉を開く。

「こんばんは。三津木さんでお間違いないですか？」

「あ、そうですけど」

「お荷物届いてます。重いので中に置かせてもらいますね」

「え？はい、じゃあお願いします…」

けれど扉を開けてみると、目深に帽子をかぶった男性から聞こえた名前は、やはり俺で間違いなかった。しかも、重い荷物が届いているらしい。わざわざ中に置くほどのものってなんだろう？親からの仕送り？それとも間違っって変なものをポ

チってる？と、俺は困惑したまま、業者さんが玄関から少し奥まった所に段ボールを置くのを見守った。

でもここで、仕事を終えて部屋を出ていくはずの男が、なぜか内側から玄関の鍵を閉めた。謎の行動に、俺の足が一步後ろに下がる。

「え...？や、あの、閉まってますけど、それ」

「ああ？分かってんだよ、んなことは。分かってて閉めたに決まってるだろ」

「ええ！？」

しかもさっきまでは物腰柔らかい雰囲気だったのに、突然口調が変わった。声も少し変えていたのか、もっとドスのきいた声色に変化している。まずい、これは一大事だ。時々ニュースで聞くようなやばい人を家に入れてしまったと、俺は情けなくも尻もちをついた。いざとなれば拳で対応できると思っていたのに、その時になると怖気づいて何もできない。靴をおざなりに脱いで近づく男性に、どたばたと四肢を動かして後退し、距離をとるしかなかった。威圧的なオーラを放つ彼に対して、貧弱な声ばかりが出てくる。

「やややや、お、俺、金とかないっすよ？親もそんな、脅してもなにも出てこないっていうか」

「金？はあ？何言ってんのお前。つか、もう忘れたの俺のこと」

「え？え？って、あああっ！！？」

けれど謎の男性が帽子を取り、乱れた髪をかきあげて整えたとき、思わず大きな声が出た。

格好は前回と違うけれど、いかつい茶髪のツーブロックに、凄みのある雰囲気。見間違えるはずのないあくどい笑い方。反射で彼の顔を目に入れた瞬間、ぶわっと全身に鳥肌が立った。思い出したくない様々な記憶がよみがえる。まずい、まずいと、背中に汗が流れ始めた。

「さっ、サワさん...？なんっ、なんで、ここに」

「ん〜？なんでって、なぁ？せっかく週5で働きます、頑張ります、研修も受けますって言った見込みのあるバイトが、1日でバックレて音信普通になったんだぞ？元気かな〜って心配になるだろ？」

「あ、そ、そう、なんすね？見ての通り、元気ですが」

「いやいや、元気ですじゃねえんだよ。元気ならシフト通り来いやクソガキが。お前、仕事舐めてんの？」

「ひいいいっ！？」

パン、と音を立てて床に捨てられた帽子に、つい悲鳴をあげてしまった。怖い。明らかにキレている。でも、怒りもするだろう。なんて言ったって目の前で眉間にしわをよせているのは、俺がバックレたバイト先の店長だからだ。澤多さんは、年下の俺に対してもあだ名で呼んでいいと言ってくれる気さくさを持っているが、腹の中では何を考えているか分からないタイプだ。そしてほじくっても、おそらく良いものは出てこない。

予想外の来訪に、俺は完全にパニックだった。よく考えてみれば、履歴書には俺の住所も載っているし、緊急時には店の責任者が家に来ることもあるだろう。だけれど、わざわざ1日で消えたバイトの家に来るとは思わないじゃないか。その異次元さもまた、彼の怖さを物語っている。

おびえてすくみあがる俺を引きずるサワさんは、迷わずベッドの方へと俺を放り投げる。うつぶせで暴れる俺に馬乗りになった彼は、その辺に放られていたタオルを手に取り、俺の手首を縛り上げた。身に覚えのあるまずい展開に、俺はとにかく言い訳を重ねる。

「なっ、え、なんで縛るんですか！謝りますから、行かなかったのは！」

「店に来なかったのが本気で悪いと思ってるやつは、もっと早く謝ってる」

「やっ、違うんです違うんです違うんですっ！行こうと思ってて、ほんとに！」

「電話もラインもフル無視のクソ野郎の言葉には信憑性がなくてな？」

「そっ、その、いろいろ忙しくて」

「なるほどな。まあ確かに、忙しい時期もあるわな。俺もそうなのかと思ったよ。ミツ、真面目そうだったし。やむにやまれぬ事情があんのかなって」

「っ、そ、そうなんですよ、ほんと急に、バタついちゃって」

しかし、言い訳をしたら口調こそは優しくなったサワさんだが、いまだに真っ黒なオーラは健在だ。なんでだよ、許してくれたんじゃないのかよと、おそろおそろ振り返る。すると目が合った彼は、長い脚で先ほど置いた段ボールを近づけた。乱雑に開けられた箱の中身を見て、俺はただただ涙が出そうになる。

「忙しいやつにとって、研修ってのは確かに効率が悪いよなあ？だけど安心しろ。多忙なミツのために、俺がじきじきにここに来てやったわ。遅れてる3週分、今日はみっちり研修してやるからな？」

「えあ...！や、や、いいです、やめますっ、俺やっぱりやめっ」

「ほらミツ、まずは飲めよ。まずは客との乾杯から始めないとな？」

「んんぐっ！」

サワさんが箱から取り出したのは、見るからに度数の高そうな酒の瓶。蓋をあければ、むわりとアルコールの匂いが広がった。強引に口に酒を突っ込まれてむせこんだあと、サワさんもそれに口をつけて飲んでいた。ドン、と床に置かれた酒の瓶すら、一気に回った酔いのせいでうまく焦点が合わなくなる。

「う、げほっ、ッ、うう...！」

「ん〜、酒はもう少し慣れといたほうがいいな、ミツは。このぐらいでへばられると売り上げになんねえ」

「こ、こんな、きついのしかないんですか...」

「だから甘えんなって。客がコレがいいって言ったらコレになんだよ。うまく流すテクもないくせに。研修さぼった分際で文句ばかりいいやがって」

「んんん...！」

怒涛のハプニングの数々に、強力なアルコールの影響もあって、俺はすっかり抵抗する気力をそがれていた。上半身を持ち上げられて、サワさんの方にもたれる

格好になっても、全く警戒心を持てなくなる。この体勢が怪しいと気づくべきなのに、判断が鈍って身体もうまく動かない。

そんな俺の胸に、背後から腕が伸びてくる。すりりと服の上から乳首の下を擦られたとき、油断もあいまって大きくのけ反ってしまった。あからさまな反応をした俺を見て、サワさんは少し楽しそうな息をこぼす。

「何？まだ全然触ってないのに、もう感じてんの？」

「ッ、や、違...っ」

「ミツさあ...。あの研修終わった後、ここ自分で弄った？」

「っ！！？」

そしてボロを出しまくりの俺は、彼の一言に大げさに肩を弾ませてしまった。そんなことはない、今更言っても遅そう。凶星と言わんばかりの俺を見て、サワさんの喉がくつくつと鳴る。

「へえ？研修はさぼったくせに、ミツは家で乳首弄ってオナってたわけ」

「そっ、んな...！そんなこと、してない」

「そうか？でもここ、前より敏感になってる」

「えっ！？なっ、そんなはずは」

「うん。嘘。前もモロ感だったよ、ミツのエロ乳首」

「はふうう...ッッ！！？」

しかも俺が嘘を重ねても、重ねなくても、サワさんのテクニックに変化はない。すりりと顔を首筋に擦りつけるように抱きしめてきたかと思うと、布越しの指がゆっくり乳首を押して、ピンと弾いた。それだけでガクリと胸を折りたたむほど悶える俺を見て、彼はじっくりと快感を積み上げていく。

布の上にあるサワさんの指は、わずかに尖る乳首を摘まむ。そしてゆっくり左右にひねって、硬さを増した突起をカリカリと擦った。ぞわっと腰が浮くような気持ちよさに、思わず歯を食いしばる。気持ちをしっかり持たなければ、あられもない声が出てきてしまいそうだ。

「んふっ...！ふっ、ふう、うううっ！」

「ふうん？声は我慢してみようって感じか。まあアリだな。反応が微妙だと、客も飽きるし」

「ひ、ッ、ん、んっ、さ、サワさんも、飽きてくださいよぉ...！」

「あのなあ、俺はお前の教育で来てんだぞ。飽きてもやるに決まってんだろ。んで、実際のところどうなんだ？やっぱり自分で弄っただろ、ここ」

「ふ、あ、あ、してない、弄って、ないっ」

口調は乱暴なのに、手つきは丁寧なサワさんに、どんどん快感を送り込まれる。これはまだ序の口だと分かっているのに、いつの間にか彼のペースにのまれてしまう。恥ずかしい気持ちを掻き立てられて、どんどん思考がエロい方向にむいていく。

でも俺の頭は、ギリギリ正常に働いていた。バイトをバックレている間、どんな風にオナっていたかなんて、いくら相手が店長であろうとも言う必要はないと思

う。けれど彼の迫及は、俺が黙秘をしても続いた。そして長く続くほどに、体と脳にダメージは積もっていく。

「研修した初日は、我慢できなくて暴れてたもんなあ。しかも乳首でイッてたし」

「っ、あ、あれは...！イキたくて、イッたんじゃなくてっ」

「舐めたら即イキしてたけどなあ？指で遊んでるときも考えたんじゃないの？また舐められたって」

「違う、思ってない、思うわけないっ！」

「おいおいムキになんなって。それじゃまるで、マジで思ってたみたいだろ？なあ、もっと上手に隠せよ、このスケベ」

「うは、ああ、あゝ...ッ！」

ねと、と首筋から耳まで舐めあげられると、頭の中で乳首を舌で刺激されたときの感覚と混ざった。架空の快感に襲われて、じわりと目に涙がにじむ。

どこから血が集まってきたんだと思うくらい、顔が熱い。態度以外の部分でも、きっと俺の最低な妄想や行動がバレている。だけれど、自分の口からは言いたくない。乳首を弄ってオナっていたことも、サワさんから舌でいじめられた日を思い出していたことも。それが嫌でバイトから逃げたのに、あの日の快感は忘れられなかったなんて。

けれどサワさんの言うように、俺は上手い言い訳も思いつかないし、演技も下手だ。だから黙るしかない。悔しい気持ちを胸に押し込めて、ぐっと身体を丸めた。手が使えない分、背骨を丸めて、足をお腹に向かって引き寄せる。ぎゅっと

身を縮めると、サワさんは手が動かしづらくなったのか、一度手を引いてくれた。

「なんだよ。前はもっと触ってくれって言ってたのに、今日は静かじゃん。それとも、接客中は暴れんなって教えたことは覚えてんの？」

サワさんは、そんな俺の行動を鼻で笑った。だけれどその一方で、怒っているようには見えない。奇跡的に、機嫌を損ねる行動ではなかったらしい。

言われてみれば前回の研修中に、じっとしておけと何度も言われた気がする。でも今回大人しくしているのは、単なる保身だ。彼の言葉を忠実に守っているわけではない。ただ、もしもこれでサワさんの評価が上がって、俺が悪戯されなくなるなら御の字だと思う。

けれど、サワさんは経験が豊富だ。ちょっと抵抗したところで、かわせる攻撃なんて知れている。だから着ていたスウェットの裾から手が入ってきて、直接脇腹を撫でられた瞬間、あれほど縮めていた身体をすぐに伸ばしてしまった。

「ふあっ！？あ、や、やあっ！」

「おいおい、何動いてんだよ。反応すんなって教えたはずだけど？」

「ひっ、あ、ああっ！？んや、あ、や、だめだめ、乳首はだめっ！」

「『ちょっとだけ触らせて』って言われたらどうすんの？触んなって言ってもしつこい奴には、むしろ触らせたほうが早いって。ミツの方が耐性つけるべきなんじゃねえの？軽い悪戯くらい耐えてみろよ」

「ああああっ！あっ！あふっ、んんんうっ！んゝ〜〜〜〜ッッ！！」

丸めていた背が伸びたのだから、当然胸も責めやすくなる。するすると上がってきたサワさんの指は、つん、つん、と確かめるように乳首に触れた。そして意識をそちらに向けてから、また反対の手で脇腹を撫でる。やばい、意外とそっちも感じると身をよじったら、今度こそ乳首を引っかかれた。だけど彼の繊細な指先は、いきなり強くつねったりはしてこない。一度だけ強烈な刺激を与えてからは、あえてねっとりと乳首に触れてくる。

くるくると乳輪をなぞって、むにりと先端を内側に押し込む。そしてそっと指を離して、次は首筋に吸い付かれた。ああ、首も感じるのにと喉を反らせば、突き出た胸の先を左右に弾かれる。声をこらえるために、なんとか口を閉じようとした。それがうまくいかなくて、ただ甘い吐息と声が漏れていく。恥ずかしいのに身体が跳ねるのも我慢できない。嫌だ、エロくなってる、どんどんエロい感じになってきていると思うのに、欲に身体が負けていく。

「ああふっ！んんうっ！ひあ、だ、め、もおだめ、だめえっ！」

「ダメって言うな。客に命令してんじゃねえよ。うまいことかわせて教えなかったか？それが無理なら我慢しろ」

「んは、はっ、はあうっ！！でき、ない、我慢できないいいいっ！！」

「ほんっとエロい身体。俺、まだ胸しか触ってないけど？どうすんの？ミツの感じるとこ、俺はまだまだ知ってんのに。ちゃんとこれ乗り越えないと、もっとエロいことされちゃうよ？いいの？またお前の身体で遊ばれちゃうよ？」

「んあ、ああ、や、だ、やだああ...っ！ひ、う、しないで、エロくなっちゃう、またイキたくなっちゃうからあっ！うあ、あ、だめ、乳首カリカリすんのだめええっ！！」

じわりと下着が湿る感覚がする。胸を刺激されたくらいで、先走りが滲んでいた。そしてこれが、いつかは精液に変わる。胸でイキたいわけではないけれど、胸でイけるのは実証済みだ。自分で遊んでいたのが裏目に出ている。感じやすくなった乳首が、上下左右にこね回されるのが気持ちよくて仕方ない。

ただただ、やばいと思った。ずくと腹の下に快感が溜まっていく。ビクン、ビクンと腰から身体が跳ねている。身をよじっても逃げられない。ガードしたいのに、腕が動かない。それがまた、俺の興奮をあおっているなんて知りたくもなかったのに。最悪だ。腕を縛られて、一方的に悪戯されてるのに。こんな変態プレイで感じるなんて嫌なのに。乳首を引っかけられると、頭が痺れて股間が熱くなる。

感じたくない気持ちと、感じやすい身体に翻弄された。首を振って理性を保とうとしても、笑いを含んだ口に耳を刺激されると、閉ざした心が流れ出していくそうになる。

「ふあ、あああうう...ッ！んは、あ、やあああっ！も、もおだめ、だめえっ！！ん、んんっ、や、あ、うううっ！」

「おいおい必死過ぎだろミツ。てか、やっぱ感度上がったか？覚えちゃった？乳首イキの気持ちよさ」

「んんっ、んンンっ！！も、や、やだ、これ以上触らないでええ...ッ！」

事態は悪化する一方だった。とにかくこのままでは、俺は乳首イキまでの最短ルートをたどっていくだけだ。不利な状況を打開しなければいけない。

感じないのも、我慢するのも無理な俺がとれる対策としては、サワさんに触られないようにするしか逃げ道はない。極論追い出すのが最も安全だけれど、できそうにもないことを考えるのは無意味だ。だから俺は、どうにか彼から乳首を守ることを最優先に考えた。

ぐぐ、と身体を前に倒す。身体をひねりながらべたりとベットに上半身をつけると、サワさんの手が伸びてこなくなった。正座をしたまま前に倒れた体勢は、手を後ろに回した土下座みたいで格好悪いけれど、見た目を気にしている場合じゃない。

前はソファの上だったから、中々体勢が変えられなかった。今回はベッドで助かった、これで胸は守れそうだと一息つく。ぐぐ、と膝を内側に入れ込めば、さらに強固な防御態勢を作ることでもできた。簡単には触れないくらい、かなりガードが固くなったと思う。

「へえ？身体やわらかいんだなあ、ミツ。いいね、特技があんのは」

でも逃げた俺に対して、意外にもサワさんは肯定的だった。この人の怒りのスイッチと、ご機嫌になるスイッチの切り替えは本当によくわからない。要は飴と鞭なんだろうけれど、サワさんと俺ではこの塩梅が少し違うみたいだ。

ただし、研修中のサワさんが、俺をほめただけで終わるわけがなかった。ほっとしたのも束の間で、彼は俺のお尻側から、腹の横の方に移動してきた。俺の横に

腰を落ち着いた彼を、こっそりと見上げる。するとサワさんは両手を伸ばして、片手を俺の後頭部に、片手を見えない下の方に移動させる。

「ほんとにいい素材だよなあ、ミツって。エロいことされんの嫌いなくせに、興味はあんだろ？マジでなんなの？そんなの、悪戯してくれって言ってるみたいなもんだよ、お前」

「んひあっ！？」

胸さえ守ればと油断していた俺の尻の上を、するりとひと撫でされた。もちろん布の上からだから刺激は少ないはずなのに、意外にも感じて驚く。彼の手は、すり、すり、と丸く円を描くように全体を撫でてから、徐々に中心に向かう。そして俺の孔の上を、ぐ、ぐ、と押してきた。

「んふ、ふ、ふ...っ！」

「で？こっちはどう？中も自分で弄った？」

「っ...！」

彼の質問に、じわりと耳が熱くなる。でもこれに関しては、明確な答えがあった。

後頭部を押されて動かしにくい頭を左右に振る。確かに、前回弄られて気持ちはよかった。でも、自分でするにはさすがに怖い場所だ。勇気がなかった俺は、乳首いじりは積極的に行ったけれど、中に指や、指以外のものを入れてはいない。

でも、刺激されると思い出す。謎の気持ちいい場所を押し込まれて、サワさんの熱で擦られた記憶が。ひくん、と孔が収縮したことに、サワさんは気づいたのだろうか。俺の身体が期待でうずいていることに、どうか気づかないでほしい。ただ、サワさんにとって俺の希望なんて二の次だった。さっきまでは優しさを見せていた手が、急にズボンのゴム部分にかかったかと思うと、一気に下におろされる。

「まあ、乳首よりは難易度上がるか？2回目まで時間空いたし、こっちも復習しとかなきゃな？」

「ううわっ！？ちょっ、ちょっと！」

「一応ローションも持ってきておいてよかったわ。お前んち、備品全然なさそうだもんな」

「ぎゃあああっ！！？ぬ、濡れてるっ！濡れてるんですけど！！」

膝を曲げている分、脱がされる範囲は限定的だったけれど、臀部はほぼ丸出しになった。しかも彼ときたら、そこに容赦なくローションをぶちまけている。おかげさまで下にあった俺のズボンがローションまみれになってしまったが、謝罪はない。むしろ、悪いとも思っていないそうだ。

最低だ。というかローションって洗濯で簡単に落ちるのだろうか。なんならシートまで滴っているんじゃないのか。ひどい、倫理が死んでる。やっぱりこの人めちゃくちゃだよと、恐怖と怒りが入り乱れる。

けれどマイペースなサワさんは、もがく俺にひよることなく、ぬぶりと指を一本入れてきた。中を占拠されたことで、俺の動きが一時的に停止する。

「んふう...っ！？っく、は、は...！」

「うん、やっぱりここは手つかずって感じだな。この前が初めてだったし、まだ中弄るのは怖いか？」

「あ、あ、あう、うう...！」

「だけど怖いだけじゃなかっただろ？ミツはここでも感じてたもんな？覚えてるか？もっと奥の...。ほら、ここ」

「んはあああうう...ッ！！？」

そして入り込んだ指は、あっさりと俺の感じる場所を見つけ出した。くく、と軽く押されただけで、全身に力が入る。本当はもっと身体が動いてもいいくらいだったけれど、サワさんの手のひらが頭を押さえているので、のけ反るのも簡単じゃない。

ぬち、ぬちと、決して激しくない速度で指が出入りする。わざといい場所を狙う指先に襲われないよう腰を振るのに、全然外れてくれない。嫌だ、また気持ちよくなってしまう。せっかく乳首は守れたのにと、悔しくて額をシーツに擦りつけた。

「うああ、あ、ああっ！だ、め、そこっ、っ、んうううっ！」

「2回目なのにこれだもんなあ。全部モロ感で最高だわ。このまま育てたらどうなっちゃうんだよ？」

「ひ、い、いや、も、なりたくないっ！ん、ん、え、っちに、なる、お尻まで、エロくなるうう...ッ！」

「そういう言い方もエロいしなあ。やっぱいいな。放置するんじゃないくて、もっと早く来た方がよかったか？」

「はふうッ！？んあ、あ、とんとんやらっ、あ、ああ、あああああ...っ！！」

とんとん、とんとん、と軽く叩くように押されると、びりびりと腰全部が痺れる。じんと骨に響く快感がせりあがって、脊髓を伝って脳まで浸透していく。だめだ、そんなところで感じるなんて変態すぎると分かっているのに、気持ちよさに心が傾いてしまう。

そして憎らしいのは、サワさんの繊細な指先の使い方だ。きっと、もっと乱暴にされたなら。痛いだろうし、苦しいだろうし、恐怖感もあるはずだ。なのに、いい場所を擦る指はあまりにも丁寧で、いっそじれったい。もっとしてくれと、思わず俺が欲しがりになる魔力を持っている。ゆっくり指を抜くのもわざとで、その後また緩やかに入れるのも意図的だ。身体が求めているところに、少し物足りないくらいの刺激を与えられる。だからどんどん、彼の策略にはまっていく。

「んはあ、ああ、あう、うううう...ッ！」

「おいおい、甘えた声出てるって。触らないでほしいんじゃないかったのか？」

「ひっ、う、ううっ、だ、ってえ...！こ、んな、俺、やなのに...！も、わけわからなく、なる、お尻、なんでええ...ッ！」

「そんなに感じてんだ。まだ二回目なのに、中弄られて腰へこへこさせて。変態だね、お前」

「ッ、ッッ...！んんっ、ち、がう、違う、っは、あゝ！？あああっ！そこずるいっ、んうっ、だめ、だめ！ああう、うっ、んゝンン〜〜〜っ！！」

じわり、じわりと外堀りが埋められる。俺が心の中で思っていることを見透かしたサワさんが、言葉でも俺を陥れてくるのが苦しい。違う、本当は感じたくないんだ。感じるのはどうしようもなくとも、望んでいるわけじゃないと否定する。でも、小さな抵抗をあざ笑う指先は、しつこいくらいにいい場所を引っかいた。悶える俺をベッドに押さえつけて、いつまでもぐにぐに、くちくちと狙われる。やめて、そんなにされたらともがくうちに、身体がだんだんベッドに近づく。その分腰が下がって、足が開くと、あられもないところが丸見えになっていった。

「あ〜あ〜、ぬるぬるでえっろいことになってるよ、ミツのここ。でも、悪戯されて感じてるから仕方ないか」

「はふっ、う、うあ、や、やだ、言わないでえ...っ！」

「そんな溶けてる声で言われてもなあ。相手を止めるなら、きっぱり断らねえと。欲しがってるって思われちゃうかもよ？」

「んふあ...ッ！！？あああう、ううっ、ん、んっ！！？ひ、いあ、あああ、やだ、やだああっ！！」

徐々に身体を滑らせたサワさんは、こてりと俺の横に寝転がった。そして頭を抑えていた手を下に移動させて、今度は俺の熱をくすぐってくる。ようやく頭が軽くなっても、ただのけ反ることで一生懸命になるばかりで悔しい。ぐんと上に跳ね上がって、背中がしなる。すると、せっかくガードしていた胸の間に、サワさんの顔が入ってきた。

彼が次にとる行動が読めて、俺は背筋が凍った。それを阻止するために、急いで胸をベッド側に近づけようとする。けれど、中に入る指が増えて、2本の指が交互にいい場所を押す気持ちよさに負けてしまった。上向きにしまった身体とベッドの間には、やすやすと侵入を許してしまった彼の顔が入り込んでくる。すり、とサワさんの上唇が乳輪に触れたとき、ぞわっと背中から首筋までの毛穴がひらく感覚がした。

「ふあああっ！あ、あ、はくううっ！」

「手も縛られて、ケツに指も入れられちゃって。ここで乳首も舐められるのはさすがにヤバいんじゃない？絶対絶命か、ミツ？」

「ッ、あ、そ、そこで、しゃべっちゃ...！」

「...はあ？お前、俺に話す場所まで指定してくんの？何様だよ。なんか今日、初日より生意気でむかつく。反省してないくせに、ピーピーわめくな」

「やっ、そんなつもりじゃ、あ、ふっ...！！？ふえ、え、あ、あああああゝあゝ...！！？」

ただ、ここで事態が悪化してしまった。俺の受け答えが悪かったらしく、サワさんの機嫌が急降下する。だから俺は、きっと何一つしゃべれないくらいいいじめられるんだと覚悟した。けれど彼は、俺の想像よりも更に精神をえぐるやり方で意地悪をしてくる。

ぱくりと乳首を咥えたサワさんに、吸ったり噛まれたりするかに見えた突起は、むしろ放置された。咥えたまま何もしないサワさんに、俺が困惑する。あれ、それだけ？何もしないの？と、こちらが先に身じろぎしてしまう。

「え、っ、っ...?なんっ、ん、なに...?や、あ、あ、ああ...!」

彼の挙動が読めない俺は、不用意な発言もできないし、大きく動くこともできない。ただ彼を見て、息を荒くするばかりだ。しかも胸への刺激が少ないだけではなく、中に入る指の動きも弱くなった。時々存在を示すように動かされるけれど、それ以外はくりくりといい場所を丸く撫でるだけの指先に、言いようのないもどかしさを覚える。なのに、俺の熱の先っぽを緩く撫でられるから、気持ちいい感覚だけはじりじりと積もっていく。感じるのに決定打はない切なさを、一方的に与えられる。

「ふうう...!んは、あ、あああ、ああふっ!んん、んんっ、は、はっ、はあ...!」

気づけば、自分で腰を動かしていた。ぐり、ぐり、とサワさんに向かって胸も突き出している。ちろりと舌先で乳首を舐められると、胸の先から電気が走った。あまりの気持ちよさに、喉をそらして喜んでしまう。些細な刺激でもたまらなくて、サワさんの指を締め付けて感じ入っていた。

「く、ふううううっ...!ふは、ッ、ん、んう、ん、んん、あ、あう...!」

でも、長いお預けに対して、与えられる蜜はほんの一滴だ。なのに、彼からのご褒美があまりにも毒だから、その甘さが忘れられない。理性が音を立てて崩れる

のを感じていた。はしたなく腰を揺らして、もっと追加してくれと全身でねだってしまう。

足りない、これじゃ足りないんだ。早く吸って、噛んで、指でいじめてと、目で訴えてしまう。それが弱みになると考えている余裕はない。頭がとろけてバカになる。ただ気持ちよくなりたい。もっと、もっとくれと、あられもない声をあげて次を求めている。

「んっ、んっ、やだ、やだぁ...！もっと、もっとしてええ...ッ！」

「じれったい？もう嫌？」

「んふっ、ッ、ああ、こ、れ、辛いいい...！う、あ、触って、舐めてっ！お願いしますっ、お願いしますうう...っ！」

「でもなあ、お前にシフト飛ばされて、連絡も無視されて、俺も辛かったしなあ。許してやるか悩む」

「はふっ...！？くう、あ、あああああゝ ああ！！」

けれど、俺が最低な願いを口にしたら、後ろから指を抜いたサワさんは、両手で俺の鬼頭を責めてきた。2つの手の中指と人差し指で、カリカリと先っぽだけを引っかかる。ローションと先走りにまみれたそこを4本の指で撫でまわされるのは、どうしようもない気持ちよさと、こらえようもない切なさを生んだ。ビクン、と腰と一緒に熱が跳ねる。それを追いかける指が、まだ俺を責めていた。ただ乱暴に、快感を与えられるよりも辛い。人を追い詰める方法を熟知した指先は、ぬるつく鬼頭をいじめるのに熱心だった。

「ひiiiiiiiッ！！んあっ、ご、めん、なさ、ああ、あああッ！！あふっ、それ、それ無理、無理いいっ！！」

「あ〜あ〜、辛い辛い。先っぽだけカリカリされて辛いなあ？やめてほしかったら、ちゃんと俺にごめんしないと」

「ッ、ふ、ぐううっ！んくっ、っ、あゝ、ご、めんな、さ...、いいッ！俺が、悪いです、全部悪かったからあッ！はひっ、ひっ、ッ、反省するから...！もぉ、イカせてっ！！」

「ちゃんと反省した？そろそろイキたい？」

「イキだいっ！！イキたい、ですっ！！イカせて欲しいですっ！！」

ぱくぱくと先走りをこぼす穴のまわりをしつこく引っかきまわされて、俺は息もできなかった。イク直前の気持ちよさが続いている。発散できないのに、一生射精の手前にいるみたいだ。バチバチと脳内で快感がはじけている。続けられるだけ、脳の大事なところが失われていくんじゃないかと思った。それくらい強くて、自分ではどうにもできない気持ちよさだ。

とにかく射精したかった俺は、サワさんの言葉に何回もうなずいた。必死に謝って、イキたいと叫ぶ。すると彼は満足したのか、指の動きを緩いものに変えて、俺が会話できる状態に戻していく。

「反省してるなら、俺の言うこと聞けるな？ちゃんと言う通りにできたら、イッてもいいよ」

「き、聞きます、なんでも聞きますっ！！」

「分かった。じゃあ手ほどくから、ベッドの上のところに手えついて、足ひらいてもらっていい？」

なんでもやると言った手前、後には引けなくなった。それでも、じゃあこれからも我慢だと言われなかっただけマシだと思う。何より、手の自由が戻ったのは嬉しい。拘束されているのといないのでは、精神への負担が違う。

正直現段階でもかなり息切れしていたけれど、モタついていたら怒られるかもしれない。可能な限り早く動かなければと、痺れる腕をついて、身体を持ち上げた。ベッドの上部に手を置いて、震える膝を叱咤して立ち膝になる。

俺としては、どうしてこの姿勢になったのかは分からない。やれと言われたからやっただけだ。でも言われた通りの事をしたら、サワさんが背後から抱きしめてきた。その腕の優しさに、心が跳ねる。ドキッとした心臓ごと、優しく掴まれた気がした。は、と息を飲めば、ゆっくりと頭を抱えられて、彼の口元に俺の耳が密着する。

「いい子」

少しかすれた、低くて甘い声が俺を狂わせる。たった一言で、脳みそが溶けるかと思った。抱きしめて囁くだけで、ここまで人を虜にできるなんて。とんだ猛者だ。敵うわけがない相手と対峙すると、人はこうも腰砕けになってしまうのだろうか。さすがはボーイズバーの店長だ。教育係も務める彼の手腕は伊達じゃない。

でも、感心しているばかりではダメだ。接客するとなれば、俺もサワさんのように甘い言葉を口にして、女の子をのせなければいけない。ホストクラブとまではいなくても、そういった絡みを求めているのは間違いないのだから。

実際、いざやってみろと言われたら、俺にもできるのだろうか。それは分からないけれど、そのための研修とも言える。だったら、今のうちにサワさんを相手に練習した方がいいかもしれない。そのぐらいの安易な気持ちで、いつのまにか彼の肩に手を回していた。

「もしも、いい子にしてたら...」

「ん？」

「俺のこと、いっぱいイカせてくれますか...？」

横にいる彼を見て、なるべく雰囲気の出るように尝试みる。熟練のセリフは思いつかないので、言葉はつたない。でもどこか期待をにじませて見つめれば、サワさんはあくどい顔をして微笑んだ。

もうこの段階で、俺の願いは叶わないのだと悟った。けれど、いじめられると分かっているのに、サワさんの言うことを聞いてしまいたくなるのはなんでなんだろう。

「うん。イケるよ？ ミツの頑張り次第で」

「ふああ...ッ！！」

彼の優しさには裏がある。少しでも希望があるとするなら、今日は我慢しろとは言われなかったことだろう。だから、俺は言いつけを守る。そうすればきっと、イカせてもらえるはずだ。

彼の指示通りにするため、俺は彼の肩から手を離してベッドの方に戻した。するとすぐに、固くなる中心部に触ってもらえた。鬼頭だけではなく全体を握って扱く手に、俺の顔は自然とほころんでいく。

嬉しい、今度こそイケそうだと思った。内側に指は入っていないから、集中して前の快感に没頭できる。イケる、とうとうイケる。焦らされた分、思い切り発散できる。そう思って、俺は射精のために息をつめたけれど。なぜか、イクと思った瞬間に彼が手を止めてしまった。

「んふっ、う、ああ、イク、イク、ッ、は、はうッ、ッッ——……

！！っ、え、あ…？」

絶頂の手前で急停止する感覚に、がくりと膝が崩れそうになる。けれど、サワさんは俺のモノから手を離してはいない。彼の手に包まれた熱は、ひくりと震えて、中途半端に精液をこぼしている。開放感がないまま、地味な射精をしている感じだ。

「んあ、あ…？え、えっ、えううっ！？」

しかも精液の放出が収まると、すぐに手が動き始めた。それがよくわからなくて、俺は心の中でモヤモヤとする。

たまたま、俺のイキたいタイミングと外れてしまったのだろうか。イク、と言ったときに手を止めたのはわざとではなく、少し早かっただけなのかもしれない。もし焦らすつもりなら完全に手を離すだろうし、意図せぬ出来事だったと思った方が納得がいく。

ずっと続けられていれば、射精はできそうだった。だから今度は、イケるまでは不用意な発言はしないよう心がける。そろそろだと口にする程度にとどめて、あとは手を動かしてしてもらった方がいい。それに、彼からもイクなどと言われていない。だったら俺は伊ってもいいはずだと、目をつむって下腹部にこみ上げる射精感に意識を集中させた。

「ひ、ああっ、伊っ、イキ、そ、う、うっ！んは、は、は、ああ、あああ——
……ッッ！！」

だけれど、またしても俺の射精は失敗した。ぴたりと絶妙な時に動きを止める手に、最高の快感を持ち越しされる。あれ、またイケなかった。なんで、今度こそと思ったのにと戸惑っているうちに、次の波が訪れる。

「ふぎ、い、いいゝ...っ！んは、はっ、あひう、イク、イク、次はイク...っ！」

でも、気持ちいい感覚は頂点まで持っていかれるのに、放出はあくまで質素だ。ダラダラと流れていく精液を、俺は何度も見送った。ここまで来ると、故意に射精を制限されているのが嫌でも分かる。

一応、かなり地味だがイケてはいる。ただ、完璧な射精じゃない。本当に出す快感を知っているから、切なくて苦しい。どうしてイケないんだ、なんであと一歩のところでやめてしまうんだと、膝を揺らしながら彼に問う。

「は、は、はあああううう...ッ！んゝっ、ぎ、い、いや、サワさん、これっ」

「腰落ちてきてるよ、ミツ？もっと踏ん張れ」

「ひいいいいッ！！」

ぬるる、と先っぽから会陰を通して、孔をくすぐる指先にいじめられる。がくがくと下半身が震えた。踏ん張れと言われても、もう膝から下は別の人のモノのようで、言うことを聞かない。くりくりと乳首を引っかかれたとき、ガクンと腰が落ちそうになった。それを根性で耐えて、腕の力で体重を支える。

「んはうっ！っく、は、はあゝっ、あああっ！」

「いいね、色っぽい。かわいいよ、ミツ」

「ひ、あ、あ、あの、ッ、ぐ...！こ、れ、俺、イケな...っ！」

「もっとぬるぬるにする？」

「んんんんぐっ！！？うは、ああ、ああああああっ！」

どろりと垂れてくるローションが皮膚を伝う感覚すら、鋭敏に感じ取っていた。なんだよこれ、めちゃくちゃ敏感になってるじゃないかと怯える俺がいるのに、イケないもどかしさに勝てない自分に飲まれる。イケればなんでもいいと、射精への欲求に気持ちが汚染される。

ぬちゅり、ぬりりと鬼頭が撫でられて、ゆっくり扱かれると背筋が反り返った。そのまま優しく腹を撫でられると、内側の深い部分がきゅんきゅんとうずく。そのままサワさんのものになりたくなる。自分の造形が崩れそうなくらいとろけていた。だらしなく舌を出して喘ぐのが止まらない。

「ふああああ...！あうう、んんう、う、ううううっ！」

「こういうぬるいのじゃ物足りなくなってきた？気持ちいいのしてほしい？強いのがいい？」

「んあ、したい、もぉイキだいいいい...ッッ！！」

「ミツがその体制キープするって約束できるなら、お前がもっと気持ちよくなれることしてもいいけど...。頑張る？俺との約束守れる？」

「んゝっ、ま、守るっ！ちゃんと守るからっ！射精させて、くださ...っ！」

「うん、じゃあもう少し足開いて？そう、そのままじっとしとけよ？」

俺の頭の中は、ほぼイクことへの欲求に埋め尽くされていた。気持ちよくなりたいと言うよりは、イキたくて仕方がない、と言った方が正しい。ただ、いずれにせよそのためには、サワさんの言うことを守る必要があった。だから彼に従う。その先に待ち受けるものなんて、考える余裕もなかった。

どうにか踏ん張って、少し腰を落として足を開いた。肩幅より少し外側まで広げると、ずっとサワさんが身を引く。けれど彼は、即座に俺の身体の下に寝転んできた。え、そんなところに寝るのかと顔を下に向けると、上を見上げるサワさんと目が合う。そして彼は俺の腰を抱えたかと思うと、パクリと熱を口に含んでしまう。

「んひ...ッ！！？っく、あ、は、は、やっ、ああ、いいっ、ッく、それ、それ
ぎもち、い、あ、あああっ！！」

ー続きは本編にてお楽しみくださいー